

今村 怜

防衛大学校

## 要 旨

砂川(2005)によれば、ハ分裂文(「XのはYだ」)は、述語に焦点を提示する後項焦点文である。特に焦点要素が名詞である場合は、その指示対象が後続談話に引き継がれるという傾向がある。この現象は「XのはYだ」という言語形式の談話機能であるとされているが、疑似相関である可能性がある。というのも、焦点部には主格が現れやすく、主格は後続文の中心になりやすいという観察があるからだ(Imamura 2017)。したがって、焦点要素と話題持続の相関関係は、焦点部が主格であることに起因する疑似相関であるという可能性を排除できない。そこで、焦点要素と文法関係を分離したデザインで、日本語分裂文のコーパス解析を行った。その結果、主題持続が焦点化だけでなく文法関係によっても影響を受けるという傾向が観察された。また、前提部は旧情報かつ焦点部は新情報であることが好まれるという傾向も観察された。それゆえ、焦点化の対象は新情報かつ主題持続の高い要素が好まれ、文法機能は主題持続にのみ影響を与えるということになる。

## 1. はじめに

日本語では、(1a)のような他動詞文と同様の命題内容を(1b)のような分裂文を用いて伝えることができる<sup>1</sup>。ただし、分裂文は有標な構文であり、使用できる文脈が限られている。具体的には、前半部(=「ハ」でマークされた部分)が「前提」かつ後半部(=述部)が「焦点」となっている場合に「X のは Y だ」のパターンの分裂文が選択される傾向がある(Iwasaki 2002: 242)。

- (1) a. トムが、リンゴを買った  
b. トムが買ったのは、リンゴだ

(adapted from Seraku 2013: 145)

砂川(2005)によれば、日本語分裂文の焦点要素(「XのはYだ」の「Y」)は、話題として後続文に引き継がれる傾向があり、この傾向は「XのはYだ」という言語形式の談話機能であるとされている。しかし、この分析には文法関係が考慮されておらず、焦点要素と主題持続の相関関係は、文法関係と主題持続の相関関係を原因とする疑似相関だという可能性がある。すなわち、分裂文の焦点要素として主語が選ばれる傾向があるために、焦点要素が後続文の中心として引き継がれる傾向が観察された、という可能性がある。そこで、本研究では、焦点要素と文法関係の2要因を考慮したデザインでコーパス解析を行った。その結論として、分裂文の焦点要素の特性とされてきた主題持続が、(主語であるか目的語であるかという)文法関係の影響も受けるという解析結果を報告する。

以下では、第2節で、分裂文の談話機能に関する先行研究および Talmy Givón の研究枠組みを提示する。続いて、第3節で本研究の分析の詳細を述べ、第4節でその結果に対して考察を加える。最後に、第5節で本論のまとめと今後の展望について述べる。

<sup>1</sup> 黒田(1998:33-4)によれば、「トムが買ったのは、リンゴをだ」のように、焦点要素に格助詞が付与された文が真の「分裂文」であり、「トムが買ったのは、リンゴだ」のように格助詞を伴わない文は「疑似分裂文」とされる。しかし、直感的には、格助詞を伴わない分裂文の方が自然に感じられる。その点に関して、砂川(2005:228)は、「意味が復元しにくい場合とその部分を特に強調したい場合は、格助詞を明示する。それ以外の場合は格助詞を明示しない」という語用論的な規則を提案している。そのように考えると、格助詞を省略した分裂文が、語用論的には無標であるということになる。つまり、機能的な観点からいえば、疑似分裂文は、「疑似」ではない。そこで、本論では、格助詞を伴わないタイプ(「XのはYだ」)を分裂文と呼ぶことにする。

## 2. 先行研究

### 2.1. 分裂文の談話機能

砂川 (2005: 203-57) によれば、日本語の分裂文は談話機能の観点から3種類に大別される。1つ目は、後項焦点文と呼ばれ、前半部が前提を担い、後半部が焦点を表すような分裂文である。たとえば、(2)では、前半部が、変項 X を含む「村のアル中たちが唯一 X を楽しみにしている」という前提命題を形成している。それに対して、後半部は変項 X に値を割り振るといって形で焦点提示機能を果たしている。すなわち、「焦点提示機能とは、前提命題に欠けている情報を提示する機能で、前提命題に欠けている情報「X」は何かという問いに対して「X」は「Y」であると同定することによって、その問いに答えを与える文である」(砂川 2005: 242)ということになる。このように、ハ分裂文は後方に焦点要素が現れるので後項焦点文であると定義される。

(2) 村のアル中たちが唯一頼みにしているのは「神様」である。

前提: 村のアル中たちが唯一 X を頼みにしていること

主張: その X が「神様」であること

(砂川 2005: 242)

それに対し、ガ分裂文は談話機能と一対一で対応していない。たとえば、(3) のガ分裂文は、「日本はどうであろうか」という問いに対する答えとして「冷戦後の世界への対応がもっとも出遅れた」という情報を提示している。したがって、この文は前半部が焦点提示機能を果たしており、後半部が前提を成している。したがって、(3)のようなガ分裂文は、前項焦点文と呼ばれることになる。

(3) それでは、日本はどうであろうか

冷戦後の世界への対応がもっとも出遅れたのが日本である

前提: 日本は X であること

主張: その X が「(日本が)冷戦後の世界への対応にもっとも出遅れた」であること

(砂川 2005: 242)

先ほどガ分裂文と談話機能は一対一で対応していないと述べたが、もう一つの焦点文は全体焦点文と呼ばれる。(4)に含まれるガ分裂文は、「その神話や伝承について言うならば」という隠れた前置きに対する答えとなっている。このように、全体焦点文の前提命題は先行談話からの推測によって生じるものであり、文中に明示的に現れるものではない。

(4) 人魚をめぐる神話や伝承は、世界中至る所に残されているが、

中でも最も有名なのがギリシャ神話のセイレーンだろう

(砂川 2005: 243)

(5) に要約されているように、砂川 (2005: 241) は「X のは Y だ」のパターンをハ分裂文、「X のが Y だ」のパターンをガ分裂文と呼んでいる。また、両者は、焦点機能の観点から相補分布をなしているという観察を提示しており、ハ分裂文は後項焦点文、ガ分裂文は前項焦点文ないしは全体焦点文の機能を持つとされる。すなわち、ハ分裂文は後半部が焦点になり、ガ分裂文は前半部ないしは文全体が焦点になるタイプの分裂文であるということになる。本研究では、ハ分裂文に絞って議論を進めていくことにする。これには2つの理由がある。まず、ガ分裂文は形式から談話機能を探ることができない。というのも、ガ分裂文には前項焦点文である場合と全体焦点文である場合があるからだ。そこで、解析の客観性を高めるために、ガ分裂文を解析の対象外とした。また、砂川 (2005) で提示されているガ分裂文の実例の多くは全体焦点文であり、前提焦点文は5例しか観察されていない。したがって、仮に前項焦点文の解析を行っても、先行研究のデータと直接比較することができない。また、全体焦点文は文全体が焦点であるために非焦点要素の主題持続を計測することができない。焦点要素の主題持続の強さを計測するためには、非焦点要素との比較検討は必須である。そこで、先行研究の分析結果と本研究の分析結果を直接比較するために、ハ分裂文のみを分析対象とした。

- (5) a. 後項焦点文「～のは～だ」—ハ分裂文  
 b. 前項焦点文「～のが～だ」  
 c. 全体焦点文「～のが～だ」 } — ガ分裂文

(砂川 2005: 241)

次に、ハ分裂文の談話機能を主題持続(Topic Persistence)から再考するものとする。主題持続は、対象となる名詞の指示対象が、後続する 10 節の中で何回言及されたのかを計億する(Givón 1988: 248)。たとえば、「太郎が食べたのは、リンゴだ」という文の後続文脈で「リンゴ」が 3 回言及されていたとすると、「リンゴ」の TP は 3 となる。なお、TP の数字が高いほど、話題として重要であるということの意味する。それゆえ、TP は後方照応的な概念である。ハ分裂文の談話機能に関して、砂川 (2005: 249-53) は、焦点部の要素が後続談話の主題として語り継がれる傾向があるという観察をしている。たとえば、ハ分裂文 (6a) の焦点部である「父」は後続文の中心になっている。このように、ハ分裂文の焦点は主題持続が高い。しかし、これは分裂文の機能なのだろうか。

- (6) a. 私とアメリカを結びつけたのは、父である。  
 b. 彼は早稲田の政経を卒業後、[以下、父についての記述が続く]

(砂川 2005: 249)

Imamura (2017) および Siewierska (1993) は、語順交替が起きた場合でも、主語の方が目的語よりも後続文の中心になりやすいという観察を報告している。たとえば、かき混ぜ文である (7b) の後続談話は、(7b) の主語である「シスコ」を引き継いでいる。このように語順とは関係なく、主語の指示対象の方が目的語の指示対象よりも後続談話に引き継がれやすい。すなわち、主題持続は文法関係の影響を大きく受ける。

- (7) a. そうなると、ネットワーク機器が必要になる  
 b. その販売をシスコが受け  
 c. 利益を上げるとい  
 d. 営業戦略である  
 e. ゆえにシスコは常に最先端のビジネスモデルを標榜できるよう  
 f. 自ら変化を続けてきた

(Imamura 2017: 76)

一方、Shimojo (2005) は、後置文における後置要素の主題持続は格とは無関係に低いという観察を行っている。たとえば、(8a) における後置要素「マキ」は後続談話に現れておらず、新しい話題へと推移している。ここで注目すべきは、後置要素がガ格でマークされていることである。通常であれば、主格は主題持続が高く、後続文の中心になりやすい。ところが、後置された要素は主格でマークされていても主題持続が低いという観察がある。すなわち、主題持続を低めるとい意味での脱焦点化(defocusing)が後置文の機能であると考えられる(Shimojo 2005: 226)。このことは、分裂文の焦点要素が文法関係とは独立して高い主題持続を持つという可能性を支持する。

- (8) a. 言った マキが  
 b. ルックスが同じ?

(Shimojo 2005: 211)

さて、ここで砂川 (2005) の分析結果について再考したい。砂川 (2005: 220) に示されているように、ハ分裂文の焦点部に現れた要素は雑多であり、主格(52%)、対格(11%)、存在/場所(5%)、与格(1%)、到達点(2%)、共同者(1%)、時間(21%)、原因(5%)、出来事(2%)、属格(1%)というものであった。ここで注目すべきは、この解析では主題持続に対する文法関係の影響が考慮されていないということである。それゆえ、焦点が後続文の中心になる傾向があるとは断言できない。というのも、主格が多数派であったために、全体として焦点要素が高い主題持続を示したという可能性を排除できないからだ。もしこの仮説が正しいのであれば、焦点部に主格以外の

要素が現れた場合は主題持続が低くなると予測される。そこで、本研究では、文法関係と談話持続性を考慮したデザインで日本語分裂文のコーパス解析を行うものとする。

## 2.2. Givón の研究枠組み

本解析では、Givón (1983,1988) の提唱する「主題持続(Topic Persistence)」と「指示距離(Referential Distance)」という概念を用いる。主題持続については前節で簡単な説明を行っているが、これは特定の指示対象の後続談話における重要度を間接的に計測するものである。すなわち、主題持続は、ある指示対象が話題としての価値がある(=重要である)という意味で‘持続している’のだということを示唆するものである (Shimojo 2005: 99)。(9a) に示されているように、主題持続は、ある指示対象が現れてから、それに後続する 10 節の中で何回言及されているのかを計測する。このようにして、主題持続は比較的狭い範囲の主題性を客観的に計測することができる。

(9) a. Topic Persistence: The number of recurrences of the referent in the subsequent 10 clauses.

b. Referential Distance: The number of clauses to the last occurrence in the preceding discourse

(adapted from Givón 1988: 248)

それに対し、(9b) に示されているように、RD は、対象となる名詞句と、その先行詞の距離を計測する。したがって、RD は前方照応的な概念である。RD の最大射程は 20 節なので、RD は 1 から 20 を付与するのが標準的な解析法である (Cooreman 1982; Hinds 1983; Hinds and Hinds 1979; Imamura 2014, 2015, 2017; Myhill 1992; Shiewierska 1993)。それゆえ、RD が大きいほど指示対象の扱う情報が新しいということになる。このように、TP と RD を用いた解析は「量的」なアプローチであり、談話機能を数値化することができるというメリットがある。こうして得たデータに統計処理をかけることで、言語機能と談話機能の結びつきを客観的に探ることが可能になる。

## 3. 分析

### 3.1. 分析の対象と手順

解析の手順としては、まず、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)から 200 例の分裂文(「X のは Y だ」)を抽出した。内訳は、(10a)のような目的語を強調する分裂文 100 例、(10b)のような主語を強調する分裂文 100 例である。次に、各構文の主語と目的語の TP および RD を計測した。そのうえで、TP および RD の値に文法関係(主語 vs. 目的語)と情報構造(焦点 vs. 非焦点)を要因とする 2×2 の分散分析をかけた。これにより、焦点要素と文法関係を分離したうえで、分裂文の談話機能を探ることが可能となる。なお、RD と TP の計測のために同一指示関係を探る必要があるが、その手法は Imamura (2014)に準拠した。

(10) a. S が V したのは O だ S=非焦点 O=焦点 [SVO]

b. O を V したのは S だ S=焦点 O=非焦点 [OVS]

### 3.2. 結果の予想

TP に関する予測は以下のとおりである。もし高い TP が分裂文の焦点要素特有の特性であれば、目的語であろうと主語であろうと焦点要素の TP に有意差はなく、共に非焦点要素よりも高い TP を示すはずである(焦点化のみ TP へ影響)。それに対し、もし焦点要素と TP の相関関係が、文法関係と TP の相関関係に起因するものであれば、焦点化の有無にかかわらず主語の TP の方が目的語の TP よりも高くなるはずである(文法関係のみ TP へ影響)。さらに、もし焦点化と文法関係が共に TP へ影響を与えるとすれば、文法関係および情報構造の主効果が共に観察されるはずである。RD に関しては、前提部(「X のは Y だ」の「X」)が低い値を示し、焦点要素は高い値を示すとだけ予想しておく。

### 3.3. 結果

表1. 各条件の TP の平均値および標準偏差

文のタイプ	文法関係	情報構造	TP	
			M	SD
SVO	S	非焦点	1.94	1.87
	O	焦点	2.72	2.29
OVS	S	焦点	3.54	2.62
	O	非焦点	1.74	2.29

分裂文の S と O の TP に関して、文法関係 (S vs. O) と情報構造 (焦点 vs. 非焦点) を要因とした分散分析を行った。まず、文法関係の主効果は有意であった ( $F(1, 99) = 4.277, p < .05$ )。これは、主語の TP が目的語の TP よりも有意に高い値を示したということを意味する。次に、情報構造の主効果も有意であった ( $F(1, 99) = 28.327, p < .01$ )。これは、焦点要素の TP が非焦点要素の TP よりも有意に高い値を示したということを意味する。しかし、文法関係と情報構造の交互作用は有意でなかった ( $F(1, 99) = 1.968, p = 0.163$ )。

表2. 各条件の RD の平均値および標準偏差

文のタイプ	文法関係	情報構造	RD	
			M	SD
SVO	S	非焦点	5.97	6.40
	O	焦点	10.59	8.70
OVS	S	焦点	10.75	8.29
	O	非焦点	6.97	8.05

次に、分裂文の S と O の TP に関して、文法関係と情報構造を要因とした分散分析を行った。まず、文法関係による主効果は有意でなかった ( $F(1, 99) = 0.303, p = 0.58$ )。一方、情報構造による主効果は有意であった ( $F(1, 99) = 26.772, p < .01$ )。これは、焦点要素の RD が非焦点要素の RD よりも有意に高かったということを意味する。なお、文法関係と情報構造の交互作用は有意でなかった ( $F(1, 99) = 0.549, p = 0.46$ )。

### 4. 考察

まず、焦点要素は非焦点要素よりも TP が高いという傾向が観察された。これは、分裂文の焦点部が前提部よりも話題として後続文に引き継がれやすいということを指すと同時に、砂川(2005)の分析結果と合致するものである。すなわち、高い TP を持つということが分裂文の焦点部の機能であるということが確認された。たとえば、(11a) の分裂文は、焦点部が目的語の例であるが、焦点部の指示対象である「カタログ」が後続文の中心となっている。これは、焦点部の要素であれば後続文の主題として引き継がれる傾向があるということを例証している。

- (11) a. 最初に彼らが刊行したのは、小さな一枚刷りのカタログだった。  
b. しかし二年のちには、このカタログは八ページとなり、  
c. すぐに七十二ページとなった。[以下カタログについての記述が続く]

(BCCWJ)

しかし、文法関係の談話機能を分裂文が覆すという傾向は観察されなかった。すなわち、情報構造の主効果に加えて、主語の方が目的語よりも TP が高いという傾向が観察された。これは、主語が目的語よりも主題として後続文の中心になりやすいということを示し、Imamura (2017) の分析結果と一致するものである。それゆえ、主題持続が、焦点化という分裂文の機能だけでなく、文法関係によっても影響を受けるという仮説を採択するのが妥当であると考えられる。文法関係と主題持続の相関関係が観察されたということは、この現象が「かき混ぜ文」に限られた現象ではなく、ある程度の普遍性を持っているということを示唆する。しかし、Shimojo (2005) で示されているように、後置文では文法関係と主題持続の相関関係が観察されていない。この違いの原因が何なのかを探ることは、今後の課題の一つである。

次に RD についてだが、前提部の RD は低く、焦点部の RD は高いという傾向が観察された。これは、前提部が談話上「旧」の情報を受け、焦点部が談話上「新」の情報を受けるという傾向があるということを示唆する。これらの結果を総括すると、焦点化の対象は新情報かつ主題持続の高い要素が好まれ、文法機能は主題持続にのみ影響を与えということになる。

## 5. おわりに

本研究では、分裂文の談話機能を Givón の観点から探った。そして、主題持続は焦点化だけでなく文法関係の影響も受けるという結果が観察された。また、前提部は旧情報かつ焦点部は新情報である状況が好まれるという傾向も観察された。このように、情報構造と文法関係は互いに独立して主題持続および指示距離に影響を与えるという結果が示された。しかし、こうした結果が今回の分析で考慮されていない要因に基づく疑似相関である可能性は否めない。また、もし文法関係による主題持続への影響が普遍的であれば、先行研究における後置文の機能の説明がつかない。後置された要素は文法関係に関わらず、全体として主題持続が低いという傾向がある。もし文法関係と主題持続の相関関係が普遍的であるならば、この現象は不可解である。かき混ぜ文、後置文、分裂文の機能を統一的に説明可能な理論の構築は、今後の課題としたい。

## 参考文献

- Cooreman, A. (1982). Topicality, ergativity and transitivity in narrative discourse: Evidence from Chamorro. *Studies in Language*, 6, 343-74.
- Givón, T. (1983). Topic continuity in discourse: An introduction. In T. Givón (ed.), *Topic Continuity in Discourse*, 5-41. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Givón, T. (1988). The pragmatics of word-order: Predictability, importance and attention. In M. Hammond, E. Moravcsik & J. Wirth (eds.), *Studies in syntactic typology*, 243-284. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Hinds, J. (1983). Topic continuity in Japanese. In T. Givón. (ed.), *Topic continuity in discourse: A crosslinguistic quantitative study*, 43-93. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Hinds, J. & Hinds, W. (1979). Participant identification in Japanese narrative discourse. In G. Bedell, E. Kobayashi & M. Muraki (eds.), *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, 201-12. Tokyo: Kenkyusha.
- Imamura, S. (2014). The Influence of givenness and heaviness on OSV in Japanese. In W. Aroonmanakun, P. Boonkwan & T. Supnithi (eds.), *Proceedings of the 28th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 224-233. Bangkok: Chulalongkorn University.
- Imamura, S. (2015). The effects of givenness and heaviness on VP-internal scrambling and VP-external scrambling in Japanese. *Studies in Pragmatics*, 17, 1-16.
- Imamura, S. (2017). A pragmatic account of scrambling and topicalization in Japanese. *Lingua*, 191, 65-80.
- Iwasaki, S. (2002). *Japanese*. Amsterdam & Philadelphia. Philadelphia: John Benjamins Publishing.

- 黒田 成幸 (1998) 「主部内在関係節」平野日出征・中村捷(編)『言語の内在と外在』東北大学文学部, 1-79.
- Myhill, J. (1992). *Typological discourse analysis: Quantitative approaches to the study of linguistic function*. Oxford: Blackwell.
- Seraku, T. (2013). Multiple foci in Japanese clefts revisited: A semantic incrementality account. *Lingua*, 137, 145-71.
- Shimojo, M. (2005). *Argument encoding in Japanese conversation*. Hampshire and New York: Palgrave Macmillan.
- Siewierska, A. (1993). Syntactic weight vs. information structure and word order variation in Polish. *Journal of Linguistics*, 29, 233-265.
- 砂川 有里子 (2005) 『文法と談話の接点: 日本語の談話における主題展開機能の研究』くろしお出版